氏名	吉田　侑加			
ヨミガナ	ヨシダ　ユカ			
学位の種類	博士（美術）			
学位記番号	博美第570号			
学位授与年月日	平成30年3月26日			
学位論文等題目	〈論文〉　「脱却と融合―白の景色へ―」			
	〈作品〉　はざま白く　けしき馳せ			
	〈演奏〉			
論文等審査委員				
（主査）	東京藝術大学	教授	（美術学部）	手塚　雄二
（論文第１副査）	東京藝術大学	教授	（美術学部）	佐藤　道信
（作品第１副査）	東京藝術大学	教授	（美術学部）	吉村　誠司
（副査）	東京藝術大学	教授	（美術学部）	梅原　幸雄
（副査）			()	
（副査）			()	
（副査）			()	
（副査）			()	
（副査）			()	
（副査）			()	

（論文内容の要旨）

＜脱却＞は私の創作動機である。幼少期、私の表現手段の全ては、舞踊による美しい人間の表現、そして舞台の中心で、主役を演じることであった。舞台作品には、絶対的な主役が存在する。脇役は背景の一部として機能し、自己表現の隙は与えられない。さらに主役は、ほとんどの場合、美しい人間が美しい人間を演じ、舞台演出は、完全な人間を肯定する構図が大半である。一方で舞台裏を見ると、完全な人間になるために、人と人が妬み、足を引っ張り合う、主役争いが蔓延っている。私はその落差に、舞台から身を引く決心をした。

舞台での経験は、完全な人間への神話性、主役という絶対的存在に対する懐疑心を生み、それらから＜脱却＞することが、絵画制作への始まりとなった。舞台作品では成し得ない、主役と脇役の主従関係を覆す表現も、絵画の世界では可能だと言える。“人”、さらには中心にある“個”、そして絶対的な“主”に支配されない、対象同士の拮抗関係を生み出す表現を、本論文では＜融合＞と呼び、自身の制作の主軸に位置付ける。

＜融合＞とは、二つ以上のものが、結び付き、重なり、混じり合い、一つになることである。私にとって絵画制作とは、一個体の対象から要素を抽出し、対象同士に新たな関係性を与える作業である。近景と遠景の主従は脱却され、等価の重なりとして、動植物の支配構造は脱却され、同質の線として時に融和し、時に拮抗しながら、一つの＜景色＞を形づくる。

また、対象と対象の間に物質的な＜白＞を描き、本来ならば背景に成り下がる空間も、対象物と等価の存在感を放つように表現する。本論文において＜白＞は、物の固有性を打ち消し、鑑賞者に想像の余地を与える重要な色である。

本論文は3章で構成される。

第1章“人”からの脱却－景色へ－

第1章では、自身の舞踊経験から生じた、人間中心的な芸術表現への違和感を探る。人間中心的な表現の例として、第1節では舞台作品、第2節では西洋美術をとり上げ、またそれらに対して第3節では、

人間中心的に展開しない日本の芸術表現を検証する。
第2章“個”からの脱却－白へ－
舞踊という身体表現から脱却した私は、絵画、そして日本画へと表現媒体を転じた。第2章では、自作品の制作過程を辿りながら、人のみならず、“個”という要素の脱却を図ったプロセスを論じる。第1節では、自作品において重要な指針となった長谷川等伯「松林図屏風」の空間表現を分析し、対象と背景という画面の主従から脱する方法を探る。第2節では、スケッチを行うことにより、一個体の対象物から脱し、対象間の関わり合いから、色、形、間の発想を得ていくまでの行程を述べる。第3節では、自作品における白の役割について説明する。白色を用いることによって、自作品は、固有色・特定の景色・個人的視野といった様々な“個”の要素から脱していく。
第3章“主”からの脱却－融合へ－
第3章では、脱却の末に辿り着いた、主従なく拮抗し合う表現、＜融合＞について解説を行う。第1節では多視点の融合、第2節では万物の融合、第3節では融合と白の景色について解説する。

（論文審査結果の要旨）

本論文は、絵画表現でのモチーフの主従や前景・背景といった序列を否定し、それらが等価に存在する画面を追求する筆者の創作論を論述したものである。

筆者は幼少時、クラシックバレエで主役をとり囲む背景の一部になったことに深く傷つき、そのトラウマが現在の表現への根本的なモティベーションとなっている。論文タイトルの「脱却と融合」は、モチーフの優劣からの脱却とその融合であり、「白の景色へ」は融合への調和剤として胡粉を多用した、雪景のような風景への志向を意味している。文脈のブレのなさは、ある意味、トラウマの強さとそれによる表現志向の明快さを物語るともいえるだろう。

第1章「“人”からの脱却―景色へ」では、バレエをあきらめて美術に転じた筆者が、なお人間像を中心とする西洋美術や洋画よりも、自然と人間が等価かつ融和的に共存する日本画に可能性を見出していった経緯について述べる。ここで風景を選択したことで、筆者は初めて人からの脱却に光を見出している。第2章「“個”からの脱却―白へ―」では、長谷川等伯の「松林図」、冬の五箇山での屋外スケッチなどから、余白や雪景といった白の世界に魅かれていった経緯を述べる。色彩が主張する個々の特性より、“漂白”されたような非現実的世界に、筆者は個からの脱却の具体的な方法論を見出している。そして第3章「“主”からの脱却－融合へ」で、提出作品にいたる表現上の試みと変遷を述べる。松島に取材した提出作品「はざま白く　けしき馳せ」二隻では、衛星写真による湾の景観、舟、松、岩などが、遠近、大小を無視して等価に同正面に描き込まれている。ここで筆者は、多視点の融合、自然物と人工物の等価化などの試みを同時に行っている。

この第3章と提出作品が、現在の筆者の到達点といえるが、ここでの「主からの脱却」と「融合」は、ことばからイメージされる“友和的”“融和的”な状況とは、ややニュアンスが異なる。筆者がここで「拮抗関係」をつくろうとしたと述べるように、主と主が勝ち負けなく共存し、その緊張関係を白が統一的につなぐ、という形のものになっている。したがって画面には、エッヂの効いた鋭角的なモチーフの形態がひしめき合っており、それはなお筆者のトラウマの強さを示すようにも見える。ただ筆者が同時に「脱却」「融合」といった語をくり返し使っていることは、それが筆者の志向と意図、希望であることも確かなのだろう。矛盾というより、筆者がいまなおそのただ中にある様子を窺わせる。

リアリティとモティベーションの高い本論文は、文脈が一貫して文体も読みやすい。学位論文にふさわしい内容として、審査会の高い評価を得た。

（作品審査結果の要旨）

吉田さんは、学部４年の頃から独自の表現に目覚め、大学院で自己表現の確立をはたしている。その結果、修了制作では大学買い上げとなり、高い評価を受けている。

表現方法は、白を基調とし、黒を幾重にも重ね、スナップを聞かせたデッサン的技法である。一見、まとまりのない表現に見えるが、画面全体での調和によって力強く独特な世界を生み出している。大胆であり繊細な画面は、若くして完成の域に達し、彼女の論文にあるように、主役が無い構成でも表面的手法によって、どんなモチーフでもこなしていける作風になっている。ただ、ドローイング的な表現の為、色による幅・硬さと空気感の無さに物足りなさを感じる。

[はざま白く　けしき馳せ]・　２枚連作になっており、博士発表会審査に出品した作品である。黒を基調にした作品と白を基調とした作品である。黒い作品は、彼女のイメージを踏襲した表現になっており、大胆で力強く彼女の真骨頂といった作品である「松を上下で大胆に切り、躍動感をより強調した構図となっています。本来であれば地面の上に樹があり、その上に空があるという構成で風景は成立していますが、あえてその構成を組み替えて、視点の遊動性を狙いました。」表現でおもしろくして、独特な作品にしあがっている。未完成的な手法で、完成度の高い作品に見せている。白い作品のほうは、「衛星写真を参考に、湾の様子を図像的に捉えています。松や岩は、現場でのスケッチを元に、有機的な姿で描き、両者を対比させています」ある意味、彼女にしては狙いのはっきりした作品である。湾の形態を強く強調しブルーにより主役として見せようとしている。主役にこだわったせいか白の部分が単調で、平板になってしまった。湾と周りの世界が融合しておらず、白というグラデーションの狭い幅においては彼女のドローイング的な表現が発揮できていない。これまでの作品と違った「主役を見せる絵」ではあるが、今までの表現を変えずに白から黒へのグラデーションの中で白の幅を増やす等、工夫がほしかった。

[空せみの樹]・「人工物と自然物、実像と虚像を融合させて描きました。」電柱とミラーを主役に描いている。彼女の独自な表現によって力強く迫力のある魅力的な作品に仕上がっている。

[時はざま]・春の院展に出品した作品である。ビニールハウスのフレームを主役に、写実的で狙いを感じる作品になっている。彼女の難解な表現と共にわかりやすい狙いによってバランスの取れた作品になっている。表面的な面白さだけではない、堅実な具象絵画の世界を生み出している。

彼女の作品が他の人の作品の中に一点混じると光を放つが、彼女のみの作品が並ぶと見ごたえに乏しくなる。何を言いたいのか一見してわからない表現方法の為、どのモチーフでも同じに見えてしまう。モチーフの狙い、見せ方、色、空気感など、バリエーションが増えると更に素晴らしい作家になると思う。

（総合審査結果の要旨）

申請者は、主体的な人間像からの〈脱却〉と、主役と脇役の拮抗関係を生み出す表現を〈融合〉と定義し、論じている。

第１章‘’人“からの脱却では、申請者が人というモチーフから脱却した末に辿り着いた行為が創作動機であると考える。長年励んできた舞踊での挫折感は、主役という絶対的存在に対する懐疑心を生んだと思われる。主役を自らに置き換え制作しても、理想とする作品とは程遠く、舞踊から脱却すると同時に自身の姿からの脱却がテーマとなっている。

第２章“個”からの脱却では、モチーフと空間という相関関係を築いている例として、長谷川等伯の「松林図屏風」をとりあげ検証している。申請者の作品の特徴でもある白を使うことにより、自我や固有性を超えた表現の可能性を見出し、描いては消すという作業を繰り返す中で、対象間の複雑な融合を生み出している。

第３章では融合について、自作品の制作初期段階に見られるドローイングやスケッチ、デジタル加工画像を用いて解説している。本画とは無関係な想定外のモチーフを画面に取り入れるなど、モチーフの選択、鋭角的な形状、その計算された心地よさは、自身にはコントロールしきれない仕事を意識的に入れ込んでいることにより生まれていると思われる。第三者視点で見ても、申請者の感情と身体の動きが無意識の中で融合しており、作品の主役は画面の中ではなく、描いている申請者本人であることがわかる。このような作風は、申請者の独自性が強く認められ、学位論文として十分な内容、レベルであると

し、審査会の承認を得た。